

新潟人

薬害肝炎問題に取り組む弁護士・田中淳哉さん(38)

社会の矛盾解決の前面に



たなか・じゅんや、1975年、上越市生まれ。高田高を経て97年、千葉大
法経学部を卒業。2003年に弁護士登録し、千葉県松戸市の法律事務所在所
属。薬害肝炎問題のほか民事、家事、刑事事件を幅広く担当する。家族は妻と幼
児2人。首都圏より地元の方が子育てに適した環境であることも考え、弁護士生
活10年を機に今年6月、上越市内に上越中央法律事務所を開設した。

引っ込み愚案だった少年
は、もう交渉の前面に立つ
ことをいとわない。

弁護士1年目から参加す
る薬害肝炎東京弁護団の一
員として、9月、県内の肝
炎対策の拡充を求める要望
書を県の担当課に出した。
おおむね前向きな回答を受
け、「今後も継続的に協力
関係を築いていく入り口と
しては良かった」とホッと
した口ぶりで語った。

弁護士になったのは「社
会に矛盾があつて、誰かの
権利が侵害されている時、
それに手を差し伸べられる
存在になりたい」から。だ
が、その信念は、元々強か

ったわけではなかった。
政治に関心の強い父に対
し、高校時代まではなんと
なくの反発心を抱き、社会
問題に興味を抱かないよう
にしていた。本当はそんな
自分に後ろめたさも感じて
いた。地元を離れ、千葉大
学への入学を機に、自分の
思いに素直になろうと、社
会問題を取り上げるサーク
ルに加入。薬害問題を知っ
た。

2年生の3月、同世代の
川田龍平・現参院議員がH
IVの薬害感染を実名で公
表した。我が子のためを思
って打った注射が感染を招
いたことを悔やむ親たちの

姿を見て、「自分や友人た
ちに起きていたかもしれない
問題。なんとかしたい」
との思いが胸に。旧厚生省
を若者で囲む「人間の鎖」
に参加し、弁護士を志し
た。

司法修習時代、ホームレ
スを支援するNPOの活動
に参加。仲間と知恵を出し
合い、活動を広げた。だ
が、自治体は根本的解決に
取り組まず、月一回、段ボ
ールハウスを管理区域の河
川敷から、自治体が管理し
なくていい国道に移すその
場しのぎの対応をとるだけ
だった。

社会問題の解決には、金
銭的にも人的にも大きな力
を持つ行政の働きが不可
欠。被害者と行政の「橋渡
し役」を務めたい、と考え
た。薬害肝炎問題でも、原

告を抱える関東甲信越や北
海道の各都道県を回り、他
の自治体の先進的な取り組
みを伝え、それぞれの対応
が良くなることを目指す。
趣味は読書。社会派企業
小説で知られる池井戸潤な
どのファン。池井戸作品で
は、大ヒットドラマ「半沢
直樹」の原作シリーズも読
んだが、「一番好きなのは
「空飛ぶタイヤ」。実際に
起きた三菱自動車製大型ト
レーラーの脱輪による死傷
事故がモチーフで、事故の
「容疑者」扱いをされた運
送会社の社長が、自動車会
社の非を執念で明らかにす
る物語だ。

「被害者が頑張らないと
問題が解決しない社会」
で、おかしいですね」。
笑顔が一瞬、引き締まっ
た。
(永田篤史)